

# 支援の現場と研究をつなぐ——

## 2009年西スマトラ地震におけるジェンダー、コミュニティ、情報

日時：2009年11月25日(水)午後2時～5時 場所：東京大学駒場キャンパス18号館ホール

主催：東南アジア学会

共催：文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」「人道支援に対する地域研究からの国際協力と評価——被災社会との共生を実現する復興・開発をめざして」(共生人道支援研究班)、JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」(グループ4-2「地域文化に即した防災・復興概念」)、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム、地域研究コンソーシアム(社会連携研究会/地域研究方法論研究会)、京都大学東南アジア研究所(公募共同研究「アジアにおける大規模自然災害の政治経済的影響に関する基礎的研究」)、東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム

**司会 山本博之(東南アジア学会)** これより、緊急研究集会「支援の現場と研究をつなぐ——2009年9月西スマトラ地震におけるジェンダー、コミュニティ、情報」を行います。本日の進行役を担当いたします東南アジア学会の山本博之でございます。どうぞよろしくをお願いします。

はじめに、この緊急研究集会の主催者である東南アジア学会の伊東利勝会長より、開会のご挨拶をいただきます。

### 開会あいさつ

**伊東利勝(東南アジア学会会長)** 皆様、本日はお忙しいところを我々の会に足をお運びいただきまして、どうもありがとうございます。私たち東南アジア学会では、会員すべてが東南アジアに何らかのかたちでかわる問題について、いろいろな研究をしております。学問の目的はさまざまですが、我々の場合、1つには東南アジアとどのような関係を構築するかを模索するというのがあります。

通常、私たちが取り組むのは、平常時の、何が起こるか予測できるような状態の中で見つけたいろいろなテーマです。歴史学の場合には侵略戦争や革命なども扱いますが、現代になってきますと、だいたいゆるやかな社会変化の中に見いだされる問題に取り組むことが普通です。こうした課題を扱いながら、最終的には、どうして東南アジアを研究するのかというようなことも考えるわけです。

本日問題にされるような、現在の人智では予測できない自然変動が瞬時に起こったときには、平常時における社会変動という視点からは予測できなかった、いろいろな問題が一挙に噴出するということがあるようです。その中には、本質的でありながら、平常時にはなかなか見えなかった社会矛盾も姿をあらわすのではないかと考えられます。従いまして、こうした大災害は、その社会と何らかの関係を取り結んできた外部の者にとりまして正面から受け止めるべきもので、研究者としても、決して見過ごしてはならないと思います。しかしこれらにどう対応するか、どのように考えるかについては、もちろん、災害にあわれた人びとに向き合うことによって模索されるべきものですが、これまで東南アジア学会としてあまり考えたことはありません。

こういう大災害が起きたときに日本の中で最初に思い浮かべるのは、「隣人が非常に困っている。何か資金的な援助を」ということですが、私たちは常日頃かなり密に東南アジアにかかわっていることもあり、その限界もあるていど認識しております。また義捐金を集めて送るだけでは、これまでのかかわり合い方を問い直すことにもなりません。学術団体として、他にすることがないだろうかと思案し、山本博之会員の発案で、このような会を今日、開かせていただいたわけがあります。お金さえ送っておけば、あとは現地の方が中心になって、現地の考え方でいろいろやっていく、それが一番いいのではないかという考え方もあります。確かにそうですが、私どもは別の世界に生きて、別の知恵というものも蓄積しているわけですから、そう

いうものも動員して現地の方がたといろいろなことを考えていくことで、私どもにとりましても、これまでの関与を見直し、新たな知見やかかわり合いの方法が見えてくるのではないかと思うわけです。

本日の会は、現地の方々が抱える問題をよりよく理解し、その解決に向けて少しでも貢献できるにはどうすればよいか、そして我々の東南アジアに対するこれまでのかかわり合い方をも問い直す、ということで開かせていただいております。この中にも当事者の方がいらっしゃると思いますが、私たちが外部から何か積極的に、その社会の復興や革新を指導したり先導したりするというものではありません。まずは被害にあわれた方々が抱えている問題を我々もできるだけ共有し、みずからの問題としても考えてみるということで、緊急研究集会を開かせていただいたわけであります。

学会の外側からも、本日はいろいろな形でご報告をいただくとお思います。学会と他の団体との連携や協力関係の構築も含めて、東南アジアに暮らす人々とどうかかわり合いのあり方があるのかということを考えていきたいとお思います。どうかよろしくお願いいたします。

## 趣旨説明

**山本** 伊東会長、ありがとうございます。

それではプログラムに入ります。はじめに、ただいま会長からこの研究集会についてお話があった通りではありますが、企画者の1人として、この研究集会の企画意図や目的などについて私から少しお話しさせていただきます。

### ■ 災害対応の緊急性

今日のこの研究集会には緊急研究集会という名前が付いています。偶然ですが、会場をお借りしている東京大学では、今日、緊急集会という名前のつく集会が2つ行われているそうです。もう1つの緊急集会は、ノーベル賞やフィールズ賞の受賞者たちによる「事業仕分けに関する緊急アピール」で、この数日の動きに対応したものであり、緊急集会の名前にふさわしい集会だろうと思います。それに対して、こちらの研究集会は9月30日に発生した地震に関するものです。地震発生から1ヶ月半が経った今、被災地の様子は日

本ではほとんど報道されなくなっていました。その意味では、この時期に西スマトラ地震に関する研究集会を行うのは緊急性が薄れていると思う方がいらっしゃるかもしれません。特に緊急人道支援に携わっている人たちから見れば、インドネシア政府は今回の震災への緊急対応期間を地震発生から1カ月間と定め、11月1日から現場では既に復興支援に入っています。したがって、緊急支援のための研究集会なら地震発生から1カ月以内に行うべきだったのではないかとお考えの人もいるだろうと思います。これは確かにその通りで、災害発生後のなるべく早い段階で専門家を集めて研究集会を行う体制を整えることが今後の課題の1つであると考えています。

他方で、理学や工学・防災の分野では、西スマトラの地震は今こそが緊急対応の段階だと考えて取り組んでいる人たちがたくさんいるということも知っておく必要があると思います。スマトラ島では、みなさんご記憶のことと思いますが、2004年12月にアチェ州付近を震源とする巨大地震が発生して、インドネシアでは約16万5000人、世界全体で約22万人が亡くなる大きな被害をもたらしました。その後、震源地がスマトラ島の南の方に移っていき、2007年9月にはベンクル州付近を震源とする地震が起きました。これを受けて、いずれ西スマトラ州のパダン付近で大きな地震が起こるだろうし、その場合には大きな津波を伴い、パダンは海沿いの大きな町なので被害はかなり大きくなるだろうという話が出ていました。そのため、工学・防災の研究者たちが地元政府と協力してパダンの防災に取り組んできたわけです。そのような状況で今回の地震が発生しましたが、今回の地震は想定されていた地震とは違う仕組みで発生したものであったため、パダンを地震と津波が襲う大きな地震の発生の可能性はまだ残っていることになります。したがって、今回の地震による被害に対しても緊急に対応する必要がありますが、その際には、いずれ起こる大地震への対応も盛り込んだものにしなくてはならないわけです。

しかし、後でご報告の中で紹介されると思いますが、今回の地震では2階建てや3階建ての建物ばかり倒壊してしまいました。いずれ起こる大地震では津波を伴うため、地震が起ったら2階建て以上の高い建物に避難するようにと指導されていたにもかかわらず、その避難先であるはずの高層の建物ばかりが倒れてしまったわけです。そのため、次に大きな

地震が起こったらどこに逃げればいいのか、パダンの人々はどの情報を信じていいのかかわからず、混乱しています。現在、日本だけでなくドイツやいくつかの国から理学および工学・防災の専門家たちがパダンに入り、調査・研究を行うとともに対策を講じるという緊急対応をしているところです。

このように、同じ震災への対応を考えても、分野によって緊急性はかなり異なります。東南アジア学会は、広い意味での地域研究に関わる学会で、個別の会員は歴史学や政治学や社会学や経済学や文化人類学などのそれぞれの専門性があることから、会員によって緊急性の捉え方も異なっています。そのような背景を踏まえた上で、今回このような形で緊急研究集会を開催することになったとご理解いただければと思います。

### ■「被災前に戻す」ではなく「よりよい社会を」

さて、今申し上げたように、同じ災害対応でも分野や業種によって捉え方が大きく異なります。これまで災害対応では、研究や報道や人道支援のそれぞれで対応が行われており、それらが必ずしも十分に連携できていなかったという状況があります。このために災害対応は克服すべき課題をいろいろ抱えていますが、ここで私が強調したいのは、災害を契機によりよい社会を作るという課題への対応です。

災害は、言うまでもなく、人命や財産を奪うという意味で非常に不幸な出来事です。その一方で、災害には、社会が潜在的に抱えていながらも、慣習やタブーといった形でその社会の人々が触れないような課題や矛盾について、それを人々の目に明らかにする契機になるという特徴もあります。しかも、災害が発生すると被災地の外の社会から来た人たちも支援活動に携わるため、被災社会の慣習に縛られない外部の支援者たちが、その社会が潜在的に抱えていた課題や矛盾に対しても働きかけ、その結果として社会が抱えていた課題や矛盾が災害対応を契機によりよい方向に改善されることもあります。これが最もわかりやすい形で見られたのが2004年のスマトラ沖地震津波を契機としたアチェの紛争終結の例でした。このように災害対応が持つ積極的な側面にもっと目を向けるべきではないかと私は考えています。

このために重要なのは、「被災前の状態に戻す」ではなく、「被災を契機によりよい社会を作る」という臨み方です。災害で壊れたものを直し、失われたものを与

えるという対応ではなく、被災前よりもよい状況を生み出すという災害対応です。このことは、先進国での災害対応よりも、人々が日常生活を営む上でいろいろな問題を抱えている国や地域での災害対応で特に重要な考え方だろうと思います。この考え方に基づいた支援活動を実施するには、被災前にその社会がどのような課題を抱えていたかを理解した上で、それを改善するために災害対応の支援活動の中にどのように支援事業を組み立てるかを考えなければなりません。そのためには、現場で得られた情報と研究者が蓄積してきた情報とを、分野を超えてうまく繋げる必要があります。その方法を模索する第一歩として、今日の研究集会では、西スマトラ地震をもとに、現場の情報と研究の情報をどうつなぐことができるかを考えてみたいと思います。

今日の研究集会は、報告者は人道支援の実務者と東南アジア学会員の研究者ですが、それ以外の関心や専門性を持った方々もたくさん参加していらっしゃると思います。主催者である東南アジア学会のほか、共催してくださった多くの団体や研究プロジェクトからもいろいろな専門性を持った方が参加してくださっています。西スマトラ地震を通じて、さまざまな分野や業種の方々がそれぞれ持っている情報や経験や考え方を交換する場となればよいと思いますので、ご参加くださったみなさんにはぜひ積極的に議論に参加してくださいませようお願いします。

簡単ですが、以上をもちまして趣旨説明に代えさせていただきます。この後、第1部では3人の報告者からそれぞれ報告していただき、その後で3人分まとめて質疑応答の時間をとります。休憩を挟んで、第2部では2人の報告者から報告していただき、さらに2人の討論者からコメントをいただいた上で、第3部ではフロアの参加者を交えて総合討論を行います。